
或る日或る時或る世界の下で 2

夢猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る日或る時或る世界の下で2

【コード】

N6886L

【作者名】

夢猫

【あらすじ】

「或る日或る時或る世界の下で」の続き。やっと主人公登場。

南の魔王から、北の魔王へ（前書き）

序章が、私のミスで短編扱いになってますが、続けております。前回は書きましたが、ベタになるような気がいたします。

南の魔王から、北の魔王へ

北の魔王へ南の魔王より

風が純白の中を、冷ややかに歌いながら流れた。古より無垢な白雪のみが荒涼と広がるその地で、影のように浮かび上がる一つの城だけが、異彩を放っている。

「永遠なる氷河城」エターナルグロシア。

凍りついた門の扉は、堅く侵入者を拒み、静かな窓の大半は、死んだように明かりも持たない。仮に、何者かが極寒の外界に迷い、助けを求めたとしても、助ける謂れは無い、とこの城は言うだろう。そういう面構えである。

その城の、最上部の一つの窓に、今、仄かな灯りが燈った。それ
に続き、数えるのをためらわれる数の窓に、あかりが宿る。
夜が、始まったのだ。

コツ・コツ・コツ……

最初に灯りを持った部屋へと、長い階段を上る青年がひとり。

その右手には、あるまじき明るさの蜜蠟燭の燭台。みつろうそく

左手には、二つの盆。

一つには、スープと柔らかな白パン。

一つには、薬草くさい液体と、清潔な白い布。

身綺麗な、糊の利いた白いシャツの上から、皺一つも無い執事服

を着込んだ彼は、見ての通りのこの城の執事。本名は、彼以外知り得ないが、その白髪から「ユキ」と呼ばれている。

コッ。

時折、足を止めては壁に据えられた燭台に、灯りを宿らせて、優雅な物腰の青年は、長い廊下の先の、その部屋へ辿り着いた。常に倣って、よく通る声で、こう言う。

「お食事と、お薬をお持ちしました」

しばしの沈黙。

答えが返る。まだ若い、少年の声。

「入れ」

いつもの如く、どこか不機嫌な声音に、苦笑しつつもユキは扉を開けた。

「失礼いたします」

一礼し、顔を上げれば、眼鏡越しにユキが見るのは、暖炉の傍の長椅子に横になっている少年の姿。

彼こそ、ユキとこの城の主。

そして、世界を支える四の柱が一人、北の魔王。

久遠の時の中で、変わること無き白銀の世界を統べる者。故に、彼^がの名はクオンと云う。

毎度のこと、何の前触れもなく、奴がやってきた。

不愉快なことこの上ない。

「っ」

傷に触れられた痛みにも、少年はその整った顔をしかめる。

「申し訳御座いません。今しばらくご辛抱を」

手当てをする執事の声聞きながら、長椅子の上につつ伏せに寝ている少年は、舌打ちした。

治りが、異常に遅い。

ふつう、背せなから剣に貫かれたくらいなら、とっくに直っているはずなのに、いまだ傷口が膿を持って、嫌な痛みかたをする。おそらくは、どこぞの聖職者が、神の力を用いて呪まじないでも施した刃だったのだろう。こうも自己治癒力が落ちては、さすがに辛い。小物の怪魔かまに構ったのが悪かったのか。

過去の行動を、多少悔いていた魔王は、育て親の声に、思考を止める。

「クオン様」

不意の声に、少年は、自身の黒い髪の間から、執事を見るた。

「なんだ」

「やはり、魔力を持つ人間を探したほうか・・・」

耳にたこが出来るほど聞いた台詞に、黒い髪の奥で青銀の瞳が、うんざり、と細められる。

「くだい。第一、そう簡単に転がっているものでもないんだ」

「しかし、他から魔力を摂らなくては、いつ治るものやら・・・」

心配する執事が、言い募ろうとしたとき、限りなく唐突に、その男は現れた。

「よお」

何が「よお」だ。勝手に人の城に上がりこんでおいて。

心中悪態をついて、舌打ちした少年は、それを隠そうともせず
その男を睨んだ。

「睨むことねえだろうよ」

睨まれた当人はどこ吹く風。クオンの背の傷と、不機嫌顔を見て
ニヤリ、と笑う。

「久方ぶりだな、北の少年魔王殿下」

ここで、手当てが終わった。この侵入者にしては慇懃な台詞に、
嫌味を感じた少年は、包帯の上からシャツを羽織ると、冷たく応じ
る。

「何の用だ。貴様に入城の許可を出した覚えはないし、その予定
も無いが？」

不愉快を前面に押ししてくるクオンに、苦笑して男は言った。

「相も変わらず、まあ……。仮にも南の魔王にそりやないだろ
う」

南の魔王：トキワの言葉に、間髪入れず切返す。

「仮にも北も魔王に、些ちかか礼を欠き過ぎる、とは思わないのか」

人がシャツを脱いで、傷の手当をしているところへ、勝手に上が
りこんでおいて。

闇より黒い髪越しに、青とも銀ともつかない目に睨まれて、夕日
色の目は、ニンマリ、と笑った。

「悪かったよ。確かにな。なに、用なんざすぐ済むさ。大変な噂
だけ？お前さんが大怪我したってな」

「そう大げさなものじゃない」

「魔王が一月掛けても治せねえ怪我を、大怪我つつうんだよ」

「だからなんだ」

あくまでも刺々しい応対に、またしても楽しげに、ニヤリ、とした南の魔王は、胸を張った。

「見舞いに来てやったんだよ」

少年は鼻で笑った。

「は。正直に言ったらどうだ。貴様のことだ、見物、あるいは嫌がらせ、・・・いや、両方か」

「はっは。そうだな。半分当たりだ」

「半分だと？」

怪訝そうに眉根を寄せた少年は、笑顔で控えている執事の盆から、酒のグラスを取り上げて一口含む。

「言つたる。見舞いだつて。ちゃんと見舞いの品を用意してきたんだぜ」

言いながら、トキワは、自分が通つてきた鏡に手を突っ込むと、「見舞いの品」を引っ張り出した。

ドサツツ。

柔らかい絨毯が受け止めたそれを見て、白髪の執事が、おや、と目を見開く。逆に至極腹立たしげに目を細めた少年は呻く。

「ちつ。なるほどな」

「ほんと言や、お前にやんの、もつたいない気もすんだがな。そーゆー顔見たかったし、死なれても困るからやるよ。好きにしていぜ？じゃあな」

したり顔の男は、満足げに言い捨て、鏡の中に消えた。

しばし、間が空いた。

けれども、そのままにして置く訳にもいかない。そつと抱き上げて、ユキは魔王を振り向いた。見れば、歳若い主は舌打ちする。

「如何なさいます」

「・・・言わなければわからんか」

黙って立ち上がったクオンの様子に、どこか安心した表情を浮かべた執事は、長椅子の上に、「見舞いの品」を横たえる。

「名前ぐらい、伺っておくのでしたね」

苦虫祖噛み潰したような顔の少年は、無言。腕を組んで、見下ろし、舌打つ。

「・・・そんなお顔をなさらなくても。お綺麗な方じゃないですか」

執事の発言は正しい。

ほっそりとした肢体を、繊細な黒いレースのドレスに包んだ少女は、クオンに引けをとらない美貌の持ち主だ。亜麻色の長い髪は勿論、今は閉じられた脛を縁取る長い睫毛まで、艶めいている。柔らかそうな肌は、南の娘にしては珍しく、白い。あと数年待てば、絶世の美女になるだろう。

が、少年魔王陛下は、ユキの発言に益々眉を顰める。

「女は好かん」

彼の名誉の為に記すが、別に男色なわけではない。ただ、魔王を見たときの人間が上げる悲鳴は、女の方が、格段にけたたましいのかしまにうんざりしたのだ。まして、この年頃の娘の姦しい事と言ったら。

「面倒だ」

彼の許容範囲を軽く超える。

苦笑した執事は、何とか魔王の機嫌を直そうと、着眼点を変えた。

「探さずに、魔力が手に入ったわけですし」

「なお悪い。その摂取の為に、喚く女を相手にしなくてはならぬのを解つて、奴はこういうことをするんだ」

治療に必要な魔力は少女の中に、なみなみと湛えられている。

「男性よりは良かったのでは？」

言われて少年は、男相手に魔力を摂取する自分を想像して、深く息を吐いた。

確かに。

頭を振って、嫌な想像を振り払った彼は、やっとのことで諦める。仕方が無いのだ、たとえ、トキワの思う壺であったとしても。

「妖あやしの麻薬に手を出したくはなかったんだが」

言いながら、少女の上に覆いかぶさるように、片手を長椅子に着いたクオンは、開いた手で、少女の顎を軽く押して、薄く紅の引かれた唇を開かせる。魔族に、麻薬は効かない。代わりに、「妖の麻薬」と呼ばれるものがある。「妙薬」とも呼ばれるそれは、稀に見つかる人間に宿る、魔力の事を指す。生まれながらに、魔族に近い人間の生命力は、魔族にとって自身生命力を補完する作用がある。まさに、今のクオンに必要な物ではあるのだ。

ただ、強い依存性がある、という点を除いては。

「自制は出来るつもりだが・・・」

何分、初めての試み。一度に多量に取り過ぎれば、あとの依存に苦勞するだろう。

心得ている執事は胸に手を当て、言う。

「私が、お止めいたしますので」

「頼んだ」

青年が一礼すると、クオンは、少女を見下ろして溜息をつく。その様子に、ユキもこっそりと溜息をついた。

(年頃なんですから、もっと違う反応があるでしょうに・・・)

大丈夫だろうか、魔王は世襲制なのに。

しばし、どこか遠くを見つめていた魔王は、何時までもそうしている訳にもいかずに、また、溜息を一つ。

おもむろに、少女の唇に、自身のそれを重ねた。

トクン。

少女の魔力の表面が揺らぐ。ゆっくりと、魔力は魔王に流れ出す。

「・・・」

傍らで見ていた執事は、胸の中で呟いた。

(絵になりますね・・・)

絶世の美少年と美少女のこの構図。世の絵描きたちが、泣いてモデルにしたがるだろう。絵画にしたら、きっといい値が付く筈だ。

(・・・クオン様に知られたら、雷が落ちますね)

主に言えない考えを、頭から払拭した彼は、少女の顔色が徐々に青くなっているのに気が付き、声を上げた。

「クオン様！」

「っ！」

弾かれたように、魔王は身を起こす。

「クオン様」

「・・・噂に違たがわず・・・強力だな」

口元を手で覆い、呟いた少年は、立ち上がると寝室のほうに歩きだす。

「後は任せる。適当に世話をしろ」

「はい」

一礼し、少女を抱き上げた執事は、手も触れずに開いた扉を不審に思うことも無く、主の部屋を後にした。呟いてみる。

明日から、このお嬢さんのご機嫌を、どう取ったものでしょうか。

言いながらも、三十年ぶりにやってきた、新たな住人の為に、彼が夜中まで部屋を整備していたのを見た、使用人たちは、首をかしげた。

ユキさん、笑顔がナンカこわい。

南の魔王から、北の魔王へ（後書き）

ヒロインがちっとも動いてませんね・・・。

次回！次回でちゃんと起こします！

名前も自己紹介させます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6886/>

或る日或る時或る世界の下で2

2010年10月9日20時38分発行